在宅要介護高齢者にとって生活の中で車いすを利用することの意味に関する研究

望月　美栄子　山崎喜比古
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻

<要　旨>

車いすを利用して生活する在宅要介護高齢者にとって、車いすを利用することがどのような意味をもつのかを明らかにし、高齢者の移動支援への示唆を得ることを目的として、車いすを利用する高齢者（インフォーマント）19名を対象として半構造化面接を行った。

その結果、8個の意味が抽出され、それらは「利用者本人の活動における意味」と「他者との関係における意味」の2つの次元に分類され、それぞれに属する意味は「肯定的な意味」と「否定的な意味」からなっていた。「利用者本人の活動における意味」の「肯定的な意味」を構成していたのは、【安心・安全・楽に移動できる】【歩けなくても外出を楽しめる】【受傷・発症前の生活とあまり変らない生活ができる】【身体の一部になる】の4個、「否定的な意味」を構成していたのは、【物理的環境による制限を受ける】の1個、「他者との関係における意味」の「肯定的な意味」を構成していたのは、【家族の心配を増やさないで済む】の1個、「否定的な意味」を構成していたのは、【押してくれる人に依存せざるを得ない】【他者のまなざしを気にするようになる】の2個の意味である。

本文では、利用者にとってのこれらの意味を考慮した、高齢者の移動支援のあり方に関して考察した。

<キーワード>　意味、車いす、在宅、半構造化面接、要介護高齢者

【はじめに】

日本では、急速な高齢者の増加に伴い、要介護高齢者数も増加している[1]。要介護状態になっても、施設ではなく在宅で暮らすことを希望する高齢者は多く[2]、介護保険の方策としても「可能な限り在宅で暮らすことを目指す」ことが掲げられている[3]。

在宅で暮らす高齢者にとって、歩行機能の喪失は、社会とのつながりの喪失、社会参加の機会の減少、セルフケアや生産活動や余暇活動を行う能力の低下などにも関連しており[4]、歩行や移動の困難は大きな問題[5]になってくる。特に脳梗塞による麻痺や転倒による骨折等で歩行に困難のある場合に移動支援機器としての車いすの果たす役割は大きい[6]。介護保険開始以来、高齢者の車いす利用は急激に増加しており[7]、今後も需要は増え続けることが予想される。

車いすは、歩行困難のある人にとって、移動を確保する重要な機器である。しかしながらもう一つの代表的な移動支援機器である杖とは異なり、車いすを利用することはこれまでの生活自体を大きく変えることになる[8]。

さらに、身体機能の低下を自覚し、その状況と折り合いをつけ、新しい自己のイメージを受け入れなければならないという心理的な適応も求められる[9)10]。京極[11]によると、車いすを含む福祉用具全般に対して、高齢者には抵抗感があるとされており、また、供給されても利用されないという報告もされている[12]ことからもわかるとおり、高齢者にとって車いすというものは、必ずしも積極的に利用されているものではない。

一方、要介護高齢者への介護において、家族や介護職などの周囲の人々が要介護高齢者の主観的経験を理解し、その気持ちに配慮した接し方[13]が必要であると言われている。また、一般的に福祉用具の開発プロセスにおいても、利用者の心理的側面を考慮することの必要性[14]が指摘されており、新しい移動支援機器の開発・改良において、利用者の視点に配慮することが求められている[15]。

【先行研究】

高齢者と福祉用具に関するこれまでの研究では、福祉用具についての知識や利用・非利用に関わる要因[16)-19]、効果を量的に把握・検討した研究[20)-24]は数多く行われてきた。また、日本では福祉用具利用の促進がうたわれており[25]、福祉用具に関する議論も盛んである。それらは、福祉用具の選択基準[26]や、快適な利用を促進するための技術改良[27)28]、制度の問題[29]など、様々な観点から行われている。しかし、これらの研究は、サービス提供者側の視点によるもので、福祉用具とその利用を利用者がどのように捉えているかという利用者側の視点は描かれていない。

一般の障害者を対象とした、利用者の視点から車いすやその他の福祉用具を利用することの意味を描いた研究では、福祉用具は障害を克服し、自由や自立、社会参加を可能にするために非常に有効[30)-32)]なものとして認識されている。一方で、障害をもつ人々を「異なる」「欠けている」として他の人々と区別させ、自己を表現したり達成したりすることの障壁としても捉えられている[32)]ことが明らかにされている。

障害者の福祉用具ではこのように明らかにされているが、Louise-Bender ら[33)]は、障害が先天性・中途・進行性・高齢により、福祉用具のもつ意味が異なることを先行研究のレビューから明らかにしている。

高齢者を対象として福祉用具の意味を描いた Gitlin ら[9)]は、福祉用具に対する利用者のコメントをポジティブ、ネガティブ、ミックスに三分類している。さらにそのコメントの内容を６つのディメンションに分類し、機器そのものに関することから、アイデンティティに影響する点まで、様々な観点から論じている。

高齢者にとっての車いすを利用することの意味に焦点を絞ると、Barker ら[34)]は、脳梗塞高齢患者 10 名に対する面接で、車いすの意味について「介護者の負担を軽減する/増加させる」「自由と制限」などの意味を抽出している。

以上のように利用者、特に高齢利用者の視点から車いす利用の意味を描いた研究は行われているものの、その数は十分ではなく、さらなる知見の蓄積が必要であると思われる。

【目的】

本研究では、様々な原因により歩行に困難をもち、車いすを利用して在宅で生活する要介護高齢者が、車いすを利用することをどのように受け止め、意味づけているのか、それらの意味はどのように構成され、変化するのかについて明らかにすることを目的とする。これらを明らかにすることにより、要介護在宅高齢者の移動支援のあり方について示唆を得る。

【方法】

1.　対象者

本研究では、実際に車いすを利用している在宅高齢者（インフォーマント）を対象とした。

インフォーマントは、首都及び首都圏近郊に住む高齢者で、基本的に３つの通所施設の利用者とした。施設の職員に、健康状態が安定している、言語障害が少ない、重度の認知障害がないなどの理由で、面接の回答が可能と判断された利用者を紹介してもらった。また、通所施設利用者以外では、知り合いのケアマネージャーが回答可能と判断した利用者を紹介してもらった。

はじめに、車いす利用期間が 3 年以上で比較的障害が重度の人々への面接を中心に行い、そのデータ分析により、利用期間や年齢、障害の程度が異なる対象への面接が必要と判断し、理論的サンプリングを実施し、最終的に車いす利用開始時から現在に至るまでのプロセスを把握することとした。

本研究のインフォーマントは、19 名（女性 16 名、男性 3 名）で、年齢は 69 歳から 94 歳までであり、平均年齢（±SD）は 81.1(±7.9)歳であった。ほとんどのインフォーマントは、脳梗塞や骨折などで入院を経験し、本人の意思とは関係なく車いすの導入は病院でなされているが、退院後の利用の状態は本人の身体状態や意向を反映し異なっていた。ある程度の歩行が可能になり、車いすの日常的な利用をやめ、必要に応じて利用している人３名、また、一度やめたが、再び歩行が困難になり、日常的な利用を開始した人 12 名、特別な病気や疾患によらないが、疲労や痛みなどのため、遠出した際や長い外出など特別な機会にのみ利用している人 2 名、若いときから受傷・発症しており、車いすを利用しながら社会参加を続けている人１名である。

2.　データ収集

本研究では、高齢者の車いすを利用することの意味やその変化を捉えるために質的研究手法を用いた。

2005 年 2 月から 11 月に、24 分～91 分、（平均 57.5 分）の半構造化面接を行った。面接場所は、施設の紹介による対象者は、施設内の個室か、できるだけ周囲の動きや音が気にならない場所で行い、施設の紹介によらない対象者は、自宅で行った。面接にあたっては、インタビューガイドを作成し、1) 日ごろの外出先と外出方法、2) 車いすの利用の仕方、3) 歩くことに関する意識、4) 車いすを利用するにあたって良い点、悪い点、5) 車いすでの生活をするようになって変化したこと、6) 車いすは自分にとってどのような存在だと思うか、などについて質問した。

面接はインフォーマント 1 件を除き、インフォーマントの同意を得て、IC レコーダーで録音した。

表１　インフォーマントの背景

ID	性別	年齢	要介護度	身体状況	普段の移動方法・使用機器 屋内	屋外	利用期間*
01	女	69	1	脳梗塞による麻痺	つたい歩行	杖	1年未満
02	女	87	2	脳梗塞による麻痺	車いす	車いす	3年以上
03	女	78	3	脳梗塞による麻痺	車いす	車いす	3年以上
04	女	85	3	くも膜下出血による麻痺	つたい歩行・歩行器	車いす	3年以上
05	女	69	2	骨折・大動脈弁置換手術経験	4点杖	車いす	3年以上
06	女	78	3	脳梗塞による麻痺・骨折	はって移動	車いす	1年以上
07	男	72	3	脊椎小脳変性症	つたい歩行	車いす	3年以上
08	女	84	2	骨折	歩行器	歩行器	1年未満
09	女	86	1	脳梗塞による麻痺	杖	杖	時々
10	女	94	1	脳梗塞による麻痺	つたい歩行・歩行器	車いす	1年以上
11	女	77	3	骨折	杖	車いす	3年以上
12	女	83	要支援	変形性膝関節症	突進歩行気味だが通常歩行		時々
13	女	91	2	骨折	歩行器	杖	1年未満
14	女	91	3	左足切断	車いす	車いす	1年未満
15	女	83	3	脳梗塞による麻痺	車いす	車いす	1年未満
16	男	79	1	左足骨折	つたい歩行	車いす	3年以上
17	女	90	4	リウマチと筋力低下	歩行器	車いす	3年以上
18	女	74	3	脳梗塞による麻痺・骨折	車いす	車いす	1年以上
19	男	70	3	脳梗塞による麻痺	つたい歩行	車いす	1年以上

＊正確な利用期間を把握できなかったインフォーマントが多かったため、目安として1年未満、1年以上3年未満（1年以上と表記）、3年以上と分類。016の男性のみ、40代で受傷し、20年以上利用している。

３．　データ分析

録音した面接は、逐トランスクリプトを作成した。分析はLofland[36]らの手法を参考にし、トランスクリプトを繰り返し読み全体の内容を把握した上で、コーディングを行い、カテゴリーを作成した。また、それぞれのカテゴリーをどのような状況の人（年齢、要介護度、利用期間、などに焦点を当て）が多く語っているのかに着目して、変化を捉えた。分析結果の妥当性を高めるため、施設の職員やケアマネージャーによるmember checking、及び研究者らとのpeer examinationを行った[37]。

４．　倫理的配慮

研究協力への依頼にあたっては、研究目的、研究方法、研究への参加および中止は自由であること、インフォーマントのプライバシーの保護、研究成果の公表について、文書および口頭で説明し、文書で同意を得た。また、国立身体障害者リハビリテーションセンター倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

１．　車いすを利用することの意味の全体構造

インフォーマントにとって、車いすを利用するということが何を意味しているのか８個の意味が抽出された。

これらの意味の全体構造を図示(図１)した。

インフォーマントが８個の意味のそれぞれを感じる強さは、利用の継続とともに、変化している傾向が見られた。図の濃淡はその感じ方の強さの変化を表している。

８個の意味は大きく二つの次元を構成していた。１つ目が車いすを利用することで、利用者本人の活動において生じる意味、２つ目が車いすの利用者本人と他者との関係において生じる意味である。さらにこれらは車いすを利用することに対して、肯定的な感情を伴って捉えられる意味と、否定的な感情を伴って捉えられる意味の２つに分けられた。

図１では、横向きに利用時間経過を表しており、利用開始時は退院直後の利用、あるいは利用し始めて間もない頃で、車いすの生活がまだ

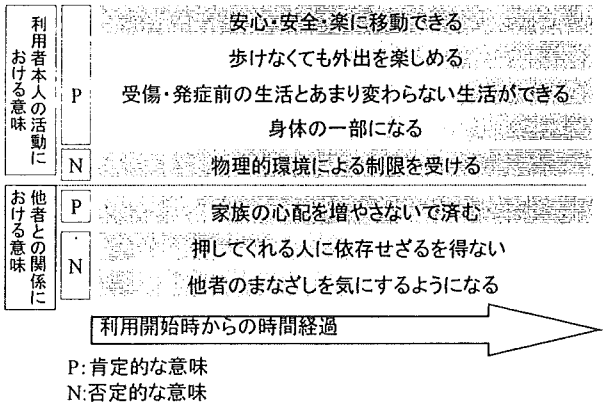

図1　車いすを利用することの意味の構造概念図

生活に馴染んでいない段階であり、右へ行くにつれて、利用時間が長くなることを表している。それぞれの意味の変化のパターンには３種類あり、①利用を開始した時点から一貫して変化しないもの【安心・安全・楽に移動できる】【家族の心配を増やさないで済む】【物理的環境による制限を受ける】、②利用当初から感じるが、利用継続にしたがって弱まっていくもの【押して

くれる人に依存せざるを得ない】【他者のまなざしを気にするようになる】、③利用継続にしたがってしだいに強くなっていくもの【歩けなくても外出を楽しめる】【受傷・発症前の生活とあまり変わらない生活が出来る】【身体の一部になる】であった。

2．　車いすを利用することの意味

以下では、「利用者本人の活動における意味」に分類される５個の意味と「他者との関係における意味」に分類される３個の意味を順に詳細に述べていく。

なお、インフォーマントの発言は『』及び縮小した文字で示した。また、文脈を明らかにするための筆者による補足を()で、また面接者の発言を[]示した。
表中の各インフォーマントのID番号は、#で示した。
意味の中のサブカテゴリーは〈〉で示す。

1）安心・安全・楽に移動できる

多くのインフォーマントが車いすに初めて乗ったときから、「安心・安全・楽」ということを実感していた。

〈疲労を軽減する〉

歩行困難は軽く、長時間の外出先で特別に乗っただけのインフォーマントも初めて乗ったときの感想は楽だったと語っている。

> やっぱり、座っちゃったら楽ですからね。で、もし、長い間、あの、ああいうところ（孫の結婚式）に、出席してて、乗らないために具合悪くなって、みんなに迷惑かけてもいけないし。まあ、ホテルの人がもう、すぐ、さっと、側まで持ってきて、乗せてくれるし。すっかり楽させて（笑）。楽ですよ、やっぱり。(#09)

〈転倒等の危険を回避する〉

全てのインフォーマントが、自分で歩くことを『尊い（#02）』『幸せ（#04）』『生きがい(#16)』『願い(#18)』などと語り、歩くことに強い価値を見出していたが、自分で歩くことの危険さと車いすの安全さを比較した上で、車いすの安全や安心感を重視していることが語られた。

> 抵抗なく歩ければね、それはそのほうがいいわよね。だけど、杖ついて転びそうになって、一歩一歩歩くんじゃ、車いすのほうがいいよね。・・・・うん。危ない危ないって緊張して、歩いてる方にとっては、車いすのほうが気が楽だね。(#02)

2）歩けなくても外出を楽しめる

本研究のインフォーマントは、全員が外出することを非常に重要と考えており、車いすがあるおかげで外出できると考えていた。
インフォーマントにとって、外出するということは、以下のような意味をもっていた。

〈行動範囲が広がる〉

日常的に車いすを利用していた時のことを『とても嫌だった』と答え、普段は装具をつけ『行ける範囲で自分のペースで歩いている』というインフォーマント(#001)も、車いすならば遠出ができるということを認識していた。そして、自分で歩きたい気持ちと目的の場所に行きたいという気持ちを比較し、時に応じて利用をしていた。

〈気分転換ができる〉

インフォーマントの外出先や外出の目的は様々である。ほぼ全てのインフォーマントにとって外出先として必須なのは病院だけであり、それ以外では、通所が最も多い外出先であった。それ以外の外出の目的は、主として家の中ばかりにいると気がめいるため気分転換として外出するというインフォーマントが多かった。春には花見を楽しんだり、特に女性は、ヘルパーや家族に買い物に連れて行ってもらうことを楽しみにしていた。

> 今ほら、100円スーパーって売ってるでしょ。家にばっかりいるとね、退屈しちゃって、うちの親父さんと喧嘩ばっかりしてるからね、たまにね、じゃあお前スーパーでも見てこいやって言うのね。100円で結構ね、うちの、奥の通りね、100円市がいっぱいできてるからね、車いすで行くとね、結構ね、いろいろ買えるの。うれしい。(#04)

〈他者との交流ができる〉

外出先で、近所の人とあいさつをするといった交流を楽しんでいるというインフォーマントもいた。

3）受傷・発症前の生活とあまり変わらない生活ができる

車いすで移動できることで、以前の生活が少しでも維持できるという意味は、主に２つの部分で生じていた。１つ目に、生活の場、２つ目に日常生活動作に関するものである。

〈受傷・発症前に暮らしていた自宅での生活ができる〉

自宅を改修してヘルパーによる介護を受けながら、独居で暮らしているインフォーマントは、車いすのおかげで一人暮らしができると感じており、車いすがなかったら、住み慣れた土地を離れて、息子家族のところに移らないといけないと考えていた。

> 私はこれがなくちゃ、一日もね（暮らせない）。とにかく、朝起きりゃ、お手洗いに出て、ほんとにそうですよね。車いすのおかげでね。どうにかこうにか、（一人暮らしで）5，6年来ちゃったもんね。(#02)

心臓の手術をした後、医師に「立ってはいけない」と言われたというインフォーマントは、施設への入所も考えたが、車いすのおかげで自宅での生活を続けられると語った。

「立っちゃだめ」とうことで、病院の先生が、「そういう施設を紹介するから、施設に行くように」って言ったの。で、施設っていっても嫌じゃない。私もそれ実際見てきてるの。そうしたら、やっぱし、なんでもないとき、みんなロビーにいるじゃない。ああいう姿見たら、やっぱし、うちがいいなあと思って。そういうところには行きたくないなと思って。そうすると、どうしても、車いすに頼るわよね。で、車いすはありがたいわ。介助があれば。(#05)

〈日常生活動作を少しでも維持できる〉

自宅で車いすを利用する必要があり、実際に利用しているインフォーマントは5名だった。これらの人々は、車いすのおかげで、『自分でトイレに行ける(#02)』『寝たきりにならずにすむ(#04)(#06)』『はって移動しなくてすむ(#03)』『テーブルでみんなと一緒に食事ができる(#11)』という日常生活動作をある程度維持できる点を掲げていた。

車いすないときなんか、(はって動いていたから)本当に骨だった。動けないでしょ。(#14)

4) 身体の一部になる

車いすを自分の『足の代わり(#03)(#15)』『身体の一部(#07)』『一緒に暮らしている感じ(#04)』など、表現は異なるが、自分の身体と同一視し、感謝しているというインフォーマントもいた。

しかし、このような思いは、当初から生じるものではなく、利用が継続され、自分の体が車いすがないとどうしようもないと自覚したころから、車いすへの感謝と同時に生じてくるものであった。

[車いすが自分の足という感覚は、乗ってすぐできるものですか。]今はもうね、そういう気ですけどね、車いすに始めて乗った頃は、ちょっと嫌でしたね。でも、今は、車いすが一番ありがたいですよね。・・・・・だんだんね、年がたってくるうちに、車いすがなくちゃいられないと思いましてね.(#18)

逆に、自分は再び歩けるようになると考えている人は、車いすが自分の身体の一部であったり、足とは思わないと答え、次のように語った。

私の場合は、まだ、一縷の望みを持ってるから、ちょっと、またこれからのね、車いすっていうもののあれが薄いのかもしれませんね。(#15)

5) 物理的環境による制限を受ける

車いすにより、移動の可能性が広がる一方で、車いすが歩行の代替を完全にするものではないこと、すなわち自由に移動できないという不満がほぼ全てのインフォーマントから表明された。

〈自由な移動が制限される〉

『段差があって自由に移動ができない(#03)』『歩道は狭くて危険(#15)』というように、段差や交通の問題を挙げるインフォーマントは多かった。また、外出先での『トイレが心配(#02)』というインフォーマントは多く、外出しづらくさせる要因と捉えられていた。

〈社会的役割や活動が制限される〉

車いすで生活をしなければならないために、『家事ができない(#15)』『絵画サークルへの参加ができなくなった(#16)』と語るインフォーマントがいた。

自宅の1階が、彫刻の作業場になっている、彫刻師であるインフォーマントは、『車いすを早くやめたい』と語り、リハビリに励んでいる理由を以下のように語った。

だから、一生懸命、歩かなくちゃさ。商売にならない。(#19)

このような、役割や活動が制限されることの不満は、比較的若いインフォーマント、あるいは障害をもって間もなく、車いす利用歴の少ない人から発言が目立った。

6) 家族の心配を増やさないで済む

無理して歩くことにより、転んでけがをしたり、体調を崩したり、あるいは事故を起こしたりすることによって、家族に迷惑をかけてしまうことを考え、車いすの安全さを重要視している人もいた。

(無理に立ったりして、転んだら)死んじゃうんならいいけどね、これ以上ひどくなったらなおね、息子に迷惑かけると思ってね(#14)

7) 押してくれる人に依存せざるを得ない

全てのインフォーマントが、手動車いすを利用しており、一部を除いて屋内では足や手である程度は動かすことはできたが、屋外で独力で移動ができる人はいなかった。また、多くが加齢による判断力の低下のため、電動車いすの利用は危険と考えており、電動車いすの利用を望むインフォーマントはいなかった。

そのため、屋外を移動するときには常に介護者に押してもらわないと移動できない。

屋内でも、自分で動かすことのできないイン

フォーマントにとっては、すぐ側に手助けしてくれる人がいなかったり、家族が忙しくしたりしている場合には、我慢してしまうということがたびたび起こっていた。

そこまで戻って、もう素直に（物を）とれません。ここにあるもの、「お願い取って」ていわなきゃなんないから、これがめんどくさい。（娘が近くにいないと）不安になります。[いなくて我慢してしまうこもあるんですか？]ありますよ、あの娘だってそんなに24時間毎日ね。自分だって歯医者いきますね。その間たとえ三時間でもじっと我慢して。・・・その間じっと我慢して。その間ね、留守にひっくり返るといけないからじっとしてます。(#17)

他者に依存することを強く拒否していた女性は、車いすが嫌だからがんばってリハビリをし、歩けるようになったと語った。

(車いすは)嫌ですよ。こんなにみんなに世話になるんだったらもう、死んだ方がいいと思っていました。（笑）[世話になるっていうのは、押してもらうことがですか？]ええ、いやなんですよ、私、自分でしなくちゃ。なんでももう。・・・（車いすだと）もう、いちいち頼まなくちゃいけませんしね、「お願いします」っていうのが嫌ですからね。(#13)

多くのインフォーマントにとって、かつては自分でできていたことを、障害をもったことにより他者に依存しないとできないということに対する抵抗感は強かった。そのため、車いすを屋内のみであれ、自分で動かせることはインフォーマントたちにとって、非常に重要な意味をもっていた。

しかし、比較的高齢のインフォーマントの中には、『しょうがない(#02)』と、他者へ依存しなければならない状況を受け入れている発言も見られた。

8) 他者のまなざしを気にするようになる

〈自分を恥ずかしく思う〉

近所の知っている人に、自分が車いすに乗っている姿を見られ、『あら、あの人あんなんなっちゃったのね(#08)』というように思われているだろうことが恥かしいという思いを抱えている人は多かった。

（人目を気にして、車いすで外に出たくないという気持ちは）うん、分かりますね。なんとなく、こう、恥ずかしいって言うんですか[そういう気持ちがありました？]ありましたね。やはり、近所で公園に行くときにね、会わないといいなっていうのが、すうっと通りますね。(#11)

しかし、この気持ちはインフォーマントから過去形で語られることが多く、また、周囲の人がもう知っているから恥ずかしいと思わなくなったと語った人もおり、しだいに弱まっていくようであった。

最初ね、車いすなんか乗ってね、恥ずかしいなあと思ってね、知ってる人に会うとね、こっち向いて歩いてたの、乗せてもらってたけどね。今ね、みんな知ってるからね、なんとも思わなくなった。(#04)

〈楽をしているというまなざしを感じる〉

普段は歩けているインフォーマント、あるいは見た目ではわからない病気で車いすを利用しているインフォーマントは、周囲からのまなざしを以下のように感じていた。

まあ、私、見たとこ、顔だけ見たら元気そうですからね、あのね、元気なおばあさんが車いすへ乗って、って思われやしないかと思ってね。なんか、引け目感じてる。(#10)

〈障害者という目で見られていると思う〉

少数ではあるが、車いすに乗っている自分は、障害者だと思われているだろうと考えている人がいた。

（車いすに乗っていると）やっぱり、障害者っていう目で見られるんじゃないかしらと思います。[そう思われるのはどうですか]嫌ですね、自分でも、障害者っていうの認めたくないような。(#11)

一方、若いときから障害を持った#16の男性は40代で片足を切断したときから、障害者団体の活動にも加わり、様々な社会参加をしてきたため、自分は障害者であるという認識をもっており、高齢になってから歩行が困難になった他のインフォーマントと比べ「障害者」と言われることに対して、違和感はないようであった。

〈かわいそう・気の毒という目で見られていると思う〉

インフォーマントの多くは、以前も現在も車いすに乗っている人を見ると、「かわいそう・気の毒」などと感じると語ったが、自分がそう思われているかもしれないと感じている人は、そのことに関して、嫌だと語った。

ほら、（周囲の人が）気の毒そうな目で見るでしょ。そうやられると、嫌ですね。(#18)

【考察】

1．　車いすを利用することの意味の全体構造について

本研究では、車いすを利用することの意味が、車いすと利用者の活動の関係の次元で生じる意

味（①）と、利用者と他者との関係の次元で生じる意味（②）の２つがあることを明らかになった。（図２）
また、それぞれの次元に属する意味は、肯定的なものと否定的なものがあることが明らかになった。

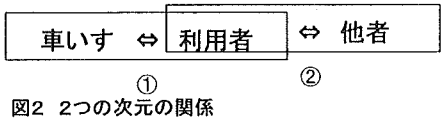

図2 2つの次元の関係

これまでの福祉用具の議論では、機能的な側面、すなわち本研究で利用者の活動に関する意味とした部分のみが重視されてきた傾向がある[38)39)]。しかし、他者との関係も同様に福祉用具利用に伴う大きな意味をもっていたことから、今後は、福祉用具が利用者本人と他者との関係に与える影響も考慮し、福祉用具の改善・開発や導入から利用継続までの利用者への支援のあり方が探求されなければならないだろう。

また、今回抽出された８個の意味は、それぞれ時間の経過とともに感じ方の強さが変化している傾向が見られた。「活動における意味」の肯定的な要素が次第に強まっていくのは、日常生活の中で繰り返し利用していく中で、実体験をもって、確認されていくためであると考えられる。また、「他者との関係における意味」の否定的な要素が弱まっていくのは、「慣れ」や「あきらめ」というものが考えられる。「あきらめ」というものは、Yamamoto ら[40)]によると、状況を「仕方がない」と認識した時の日本人に共通の認知的コーピングと考えられるとされており、本研究でも、インフォーマントの中には、「仕方がない」と発言する人も多く、否定的な意味の弱まりにも「あきらめ」という認知的コーピングが行われている可能性があると考えた。

福祉用具が有効に利用できていると感じている人ほど、利用への意欲も高い[41)]というように、車いすも肯定的な意味を多く見出し、自分の活動の範囲を広げるために有効だと認識できると、受け入れが進むのではないかと考えられる。

２．車いすを利用することのそれぞれの意味について

1）「利用者本人の活動における意味」

「肯定的な意味」を構成する【安心・安全・楽に移動できる】【歩けなくても外出を楽しめる】【受傷・発症前の生活とあまり変らない生活ができる】は車いすの本来の機能である「移動支援」が、利用者にとって有効に機能していることの表れであると考えられる。そして、これらの意味を見出し、車いすにより活動の幅が広がることが実感できると、車いすが【身体の一部になる】という意味が見出されるのではないかと考えられた。この意味は、量的な先行研究[42)]の結果と同様、比較的障害の重いインフォーマントに見出されていた。再び歩くことを望めない高齢者にとっては、車いすが身体の一部になるという感覚を得られることは、車いすの利用を前向きに捉えられている結果であり、大切なことであると考える。

「否定的な意味」を構成していた【物理的環境による制限を受ける】は、歩行が可能だったときと比較すると、車いすが完全に移動を代替してはいないことの表れであると考えられる。先行研究[30)]においても、車いす利用には「自由」や「自立」と同時に「制限」が生じていることが明らかにされており、本研究でも同様の結果が表れた。その一要因として、居住環境、地域環境といった環境要因が大きい問題であることが示唆された。

2）「他者との関係における意味」

これは、車いすの機能である移動から直接生じているものではなく、車いすを利用するが、周囲の人々との関係に影響を及ぼす[32)]ことから発生していると考えられる。

「肯定的な意味」では、【家族の心配を増やさないで済む】という意味が挙げられた。脳梗塞高齢患者を対象とした欧米の先行研究[34)]では「家族の負担を軽減する」という意味が挙げられており、本研究の結果と類似したものではあるが、先行研究が心身の負担軽減にまで及んでいる一方、本研究の結果は心理的な負担軽減に限定されていた。理由の一つに、以下に述べる「否定的な意味」の依存の部分が、インフォーマントにとって大きな意味をもっているためであると考えられるが、家族を思いやる点では一致している。量的研究[23)]によっても車いすを含む福祉用具がインフォーマルケアの負担を軽減することは実証されており、車いす利用が家族にとってもメリットのあることが、さらに利用者にも理解されることは、家族関係における精神的安定につながる可能性も考えられる。

「否定的な意味」では、【押してくれる人に依存せざるを得ない】という意味が多くのインフォーマントに強くもたれていた。要介護になっても高齢者にとって、自立は重要な意味をもっており[43)]、車いすに乗り、他者に依存しなければ移動できないことは、すぐには受け入れがたいことだろう。しかし、身体的には依存していても、自律、コントロール感を維持し続けられる限り、自立感を保てるという先行研究[43)]もある。そこで、車いすを利用しながらも、自律、

コントロール感を保てる方法を今後、検討する必要がある。

また、【他者のまなざしを気にするようになる】ことは、車いすが屋外で利用することが多い[9]ために生じていると考えられる。また、在宅で暮らしている場合は施設で暮らす高齢者よりも、不特定多数の人々と触れ合う機会が増えるため、施設での利用よりも、在宅で利用している高齢者のほうが強まる意味であるといえるだろう。

〈自分を恥ずかしいと思う〉という意味は、車いすを利用しなければ移動できないほど、衰えてしまった自分を他者に見られるために「恥ずかしい」と思うもので、福祉用具に関する先行研究では述べられておらず、今回初めて明らかにされたものである。

車いすに乗っていることで、「障害者」と思われることは、Lupton らの研究[32]でも言われているように、車いすが障害の象徴的扱いを受けていることから生じていると考えられる。また、〈かわいそう・気の毒〉という憐れみも、障害者に対する人々の反応[44]と関連して生じていることが考えられる。

自分が感じる他者のまなざしは、かつての自分がそのものに向けていたまなざしと関連がある[45][46]との指摘もあり、車いす利用に関しても、自分が感じているまなざしは、かつて車いす利用者に対して自分が向けていたまなざしである可能性も考えられる。

3．利用者にとっての意味から得られた実践への示唆

本研究の結果から以下のような示唆が得られたと考える。

第一に、物理的環境の整備を進め、自由に移動できる範囲を広げていくことが必要である。

第二に、介護者は、本研究の結果を踏まえて、車いす利用者と接し、支援していく必要がある。特に、利用初期段階の心理的サポートと、抵抗をもつ人には、その気持ちに寄り添って受け入れを待つという姿勢が重要であろう。

第三に、導入段階での抵抗感[11]がたびたび問題になるが、今回明らかになった肯定的な意味を利用者に理解してもらう働きかけは、スムーズな導入のためにも有効であると考える。

最後に、他者のまなざしが車いす利用へ大きな壁になっていると考えられることから、車いす利用者に対する見方を変えていくような社会全体への働きかけが必要であろう。

4．本研究の限界と今後の課題

本研究には以下のような限界と今後の課題があると考える。

本研究のインフォーマントは、首都及び首都近郊に住む高齢者に限られており、住環境や道路事情、サービスなどの異なる地域では、異なった意味が見出されている可能性がある。よって、本研究の一般化には限界があり、今後、他地域での研究、より多くの対象者についての研究が必要だろう。

今回は、全体構造として、意味の変化を描いたが、インフォーマントの中には、軽度の認知症のために想起が困難なインフォーマントも含まれていた。そのため、様々な段階の人のデータで変化を捉え、今後利用者一人一人の経時的変化を捉える必要があるかもしれない。

今回、車いす利用にいたる原因（事故か疾患か、疾患の種類など）によって違いは見られなかったが、先行研究の中には、それらにより違いがあることも指摘されており、今後、検討が必要である。

しかし、これらの限界や今後の課題があるものの、今回、車いす利用者の視点から車いすを利用することの意味を明らかにしたことによって、車いす利用者の経験を理解する重要な資料が得られたと考える。

【結論】

在宅で車いすを利用して生活する高齢者および高齢者の車いす利用に関わる職業の人々への半構造化面接により、以下の４点が明らかになった。

１．在宅要介護高齢者にとって車いすを利用することの意味は、８個の意味が抽出された。

２．それらの意味は、「利用者本人の活動における意味」と「他者との関係における意味」からなり、さらにそれぞれに属する意味には、どのような感情を伴って捉えられるかによって「肯定的な意味」と「否定的な意味」があるという構造をもっていた。

３．それぞれの意味の感じ方は、時間の経過とともに、一貫して変化しないもの、強まるもの、弱まるものの３パターンがあった。

４．利用者本人がもつこれらの意味は、高齢者の移動支援を考えていく上で考慮しなければならないものであると考えられた。

【文献】

1) 厚生労働省．介護保険事業状況報告 .Retrieved 1/9,2006fromhttp://www.mhlw.go.jp/topics/0103/tp0329-1.html

2)内閣府.高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査.Retrieved1/9, 2006from http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h12_sougou/pdf/0-1.html
3) 2015 年の高齢者介護 高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～高齢者介護研究会報告書～ (2003 年 6 月 26 日) .法研
4) Finlayson M, van Denend T. (2003). Experiencing the loss of mobility: Perspectives of older adults with MS. Disability & Rehabilitation, 25(20), 1168-1180.
5) Hoxie RE, Rubenstein LZ, Hoenig H et al. (1994). The older pedestrian. Journal of the American Geriatrics Society, 42(4), 444-450.
6) Norburn JE, Bernard SL, Konrad TR et al. (1995). Self-care and assistance from others in coping with functional status limitations among a national sample of older adults. Journals of Gerontology Series B-Psychological Sciences & Social Sciences, 50(2), S101-9.
7) 厚生労働省. 介護給付費実態調査. Retrieved 1/9, 2006fromhttp://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/kyufu/03/
8) 岩隈美穂. (2004). 【現代のリハビリテーション・アプローチを支える考え方】 見る立場から見られる立場へ 人はいかにして「障がい者」になるのかについての一考察. Quality Nursing, 10(7), 629-633.
9) Gitlin LN, Luborsky MR, Schemm RL. (1998). Emerging concerns of older stroke patients about assistive device use. Gerontologist, 38(2), 169-180.
10) Bates PS, Spencer JC, Young ME et al. (1993). Assistive technology and the newly disabled adult: Adaptation to wheelchair use. American Journal of Occupational Therapy, 47(11), 1014-1021.
11) 京極高宣. (2005).福祉用具製作 介護サービスの質的向上と日本ケアマネジメント学界の創設. In 京極高宣, & 市川洌 (Eds.), 新訂 福祉用具の活用法 (pp. １２-２１). 東京: (株)北隆館.
12) Wessels R. (2003). Non-use of provided assistive technology devices, a literature overview. Technology and Disability, 15, 231-238.
13) Elliott KS, Campbell R. (1993). Changing ideas about family care for the elderly in japan. Journal of Cross-Cultural Jerontology, 8, 119-135.
14) 二瓶美里, 井上剛伸, 望月美栄子 et al. (2005). 高齢者の心理概念モデルを導入した移動支援機器の開発プロセス. 日本機械学会. 5(44).103-105.
15) 西平哲也. (2002). 【テクニカルエイド 福祉用具の選び方・使い方】 テクニカルエイドと共に生きる 開発者の立場から 利用者の視点に立った製品化. 作業療法ジャーナル, 36(6), 532-533.
16) Dekker J, Rijken M, Van Poppel M et al. (2003). The possession of technical aids among persons with a somatic chronic disease. Disability and Rehabilitation, 25(8), 393-398.
17) Roelands M, Van Oost P, Depoorter A et al. (2002). A social-cognitive model to predict the use of assistive devices for mobility and self-care in elderly people. Gerontologist, 42(1), 39-50.
18) Hartke RJ, Prohaska TR, Furner SE. (1998). Older adults and assistive devices - use, multiple-device use, and need. Journal of Aging and Health, 10(1), 99-116.
19) 嶋村清志, 中田ゆかり, 中川敦美 et al. (1999). 福祉用具普及モデル事業の利用状況とその効果. 厚生の指標, 46(7), 28-36.
20) Mann WC , Hurren D, Tomita M. (1993). Comparison of assistive device use and needs of home-based older persons with different impairments. American Journal of Occupational Therapy, 47(11), 980-987.
21) Mann WC, Ottenbacher KJ, Fraas L et al. (1999). Effectiveness of assistive technology and environmental interventions in maintaining independence and reducing home care costs for the frail elderly. A randomized controlled trial.[see comment]. Archives of Family Medicine, 8(3), 210-217.
22) Agree EM. (1999). The influence of personal care and assistive devices on the measurement of disability. Social Science & Medicine, 48(4), 427-443.
23) Agree EM, Freedman VA, Cornman JC et al. (2005). Reconsidering substitution in long-term care: When does assistive technology take the place of personal care? Journals of Gerontology Series B-Psychological Sciences and Social Sciences, 60(5), S272-S280.

24) Ivanoff SD, Sonn U. (2005). Changes in the use of assistive devices among 90-year-old persons. Aging Clinical and Experimental Research, 17(3), 246-251.
25) Association for Techinical Aids, Inc. 財団法人テクノエイド協会. Retrieved 1/9, 2006 from http://www.techno-aids.or.jp/
26) 田中理, 藤井智. (2003). 【介護保険と地域リハビリテーション】 どう選ぶ?福祉用具の適応基準は. MEDICAL REHABILITATION, (34), 71-80.
27) 光野有次. (2004). 【安全で快適な車いすの活用】 車いすを安全で快適に使うために「長時間座っても疲れにくい」をテーマに追求されてきた車いす介護保険施行で飛躍的に普及. GPnet, 51(6), 21-26.
28) 松永紀之. (2004). 【安全で快適な車いすの活用】 車いすの種類と構造 利用者,介助者の満足度を高める時代のニーズに合った車いすの開発. GPnet, 51(6), 27-33.
29) 邊見眞. (2004). 【安全で快適な車いすの活用】 高齢者用車いすの開発 施設,在宅問わず身体に合った車いすの選定が可能な制度に. GPnet, 51(6), 34-37.
30) Reid D, Angus J, McKeever P et al. (2003). Home is where their wheels are: Experiences of women wheelchair users. American Journal of Occupational Therapy, 57(2), 186-195.
31) Brooks NA. (1991). Users' responses to assistive devices for physical disability. Social Science & Medicine, 32(12), 1417-1424.
32) Lupton D, Seymour W. (2000). Technology, selfhood and physical disability. Social Science & Medicine, 50(12), 1851-1862.
33) Louise-Bender PT, Kim J, Weiner B. (2002). The shaping of individual meanings assigned to assistive technology: A review of personal factors. Disability & Rehabilitation, 24(1-3), 5-20.
34) Barker DJ, Reid D, Cott C. (2004). Acceptance and meanings of wheelchair use in senior stroke survivors. American Journal of Occupational Therapy, 58(2), 221-230.
35) Roper, J. M., & Shapira J. (2000). Ethnography in nursing research. Sage Publications, Inc. 麻原きよみ, グレッグ美鈴訳. (2003)エスノグラフィー. 日本看護協会出版会.
36) Lofland J, Lofland L(1995). Analyzing social settings:a guide to qualitative observation and analysis. Wadsworth 進藤雄三, 他, 訳. (1997)社会状況の分析:質的観察と分析の方法. 恒星社厚生閣
37) Creswell JW. (1998). Qualitative inquiry and research design choosing among five traditions. Sage Publications, Inc.
38) 橋本虎之助. (1993). 高齢化社会と福祉機器技術総合政策の展開. 日本機械学会誌, 96(898), 780-783.
39) 京極政宏. (2005). これからの少子・高齢社会における新しい市場の創造に向けて. 日本機械学会誌, 108(1038), 373-378.
40) Yamamoto-Mitani N, Wallhagen MI. (2002). Pursuit of psychological well-being (ikigai) and the evolution of self-understanding in the context of caregiving in japan. Culture Medicine and Psychiatry, 26(4), 399-417.
41) Roelands M, Van Oost P, Buysse A et al. (2002). Awareness among community-dwelling elderly of assistive devices for mobility and self-care and attitudes towards their use. Social Science & Medicine, 54(9), 1441-1451.
42) Antler L, Lee MH, Zaretsky HH et al. (1969). Attitude of rehabilitation patients towards the wheelchair. Journal of Psychology, 73(1), 45-52.
43) Aberg AC, Sidenvall B, Hepworth M et al. (2005). On loss of activity and independence, adaptation improves life satisfaction in old age--a qualitative study of patients' perceptions. Quality of Life Research, 14(4), 1111-1125.
44) Barton L. (1996) Disability & Society: Emerging issues and insights. In Disability & Society: Emerging issues and insights. Editied by Barton, L. pp3-17. Pearson Education Inc.
45) Crossley (neeDavies) ML. (1997). "Survivors" and "victims": Long-term HIV positive individuals and the ethos of self-empowerment. Social Science & Medicine, 45(12), 1863-1873.
46) Green SE. (2003). "What do you mean 'what's wrong with her?'": Stigma and the lives of families of children with disabilities. Social Science & Medicine, 7(8), 1361-13